

選 評

——第25回茨城県統計グラフコンクール——

県統計グラフコンクール審査員
教育庁指導主事

大 金 義 男

本年度の応募点数は、小学校の部（第1、2部）949点、中学校の部（第3部）285点、計1,234点で、総数では昨年度とほぼ同数である。一方、応募校数は年々増加し、延べ数で昨年度の289校に比べ本年度は325校となった。このことから、応募に際して、各学校はもちろん、郡市町村の各地区では予選を行っていることがうかがわれ、統計についての関心が次第に広まっていると言えよう。

これには、統計図表巡回展示会や統計グラフ指導者講習会の開催及び各学校への統計カレンダーの配布などが大きな推進力になっていると考えられる。

一般的な傾向として、明るい作品が多くなり、また、表現技術の向上がみられる。小学校の部については、自分で資料を収集または作成することになっているので、その努力のあとがみられるが、主題についての考察が不十分なものもある。中学校の部については、応募点数の増加とともに力作が多く、優劣の較差が少ないが、作図法、単位の表示など細部について欠点のあるものが見られる。

入選作品のうち、第1部（小学1年～3年）の「ヘチマは日なたでよくそだつ」は、3年生の学習に直結しており、観察の結果がわかり易く表現され、図表全体がよくまとまっている。

第2部（小学4年～6年）の「誰が汚したこの河原」は、棄てられた空き缶の数を調べたもので、訴える力を持っており、資料のまとめ方、表現のし方にも創意工夫がみられる。

第3部（中学生）「茨城の公害とその苦情」は、グラフの選び方や配置が適切であり、色彩の組み合わせもよく、主題の暗さを感じさせず、全体としてひきつけるものがある。

審査の結果から、今後の留意点をあげると、次のようである。

1. 何を言おうとしているか主題を明確にするとともに、それにふさわしい表題をつける。
2. 単なる観察や調査の記録にとどまらず、それによって何かを読みとられるように表現を工夫する。

3. 第1、2部については、既存の統計資料を使用してはならないことに注意する。
4. 第3部において既存の統計資料を使用する場合は、出所を明示し、信頼性を確かにする。
5. 図表の構成に当たって、グラフの種類と文字の量、大きさ、配置を工夫するとともに、色の組み合わせ、コントラスト、明るさなど全体のつり合いを考える。
6. 基本的な作図法とくに単位の示し方、円グラフの表し方などに注意する。
7. 作品の用紙や貼付する統計表などの規格を守ること。

以上のことに留意して、いっそう優れた作品を多数応募されるよう期待している。



第1部 小学校高学年) 1席

結城市立結城小学校6年

住谷 堅吾 海老原 孝一

◇昭和49年度統計グラフ全国コンクール特選◇